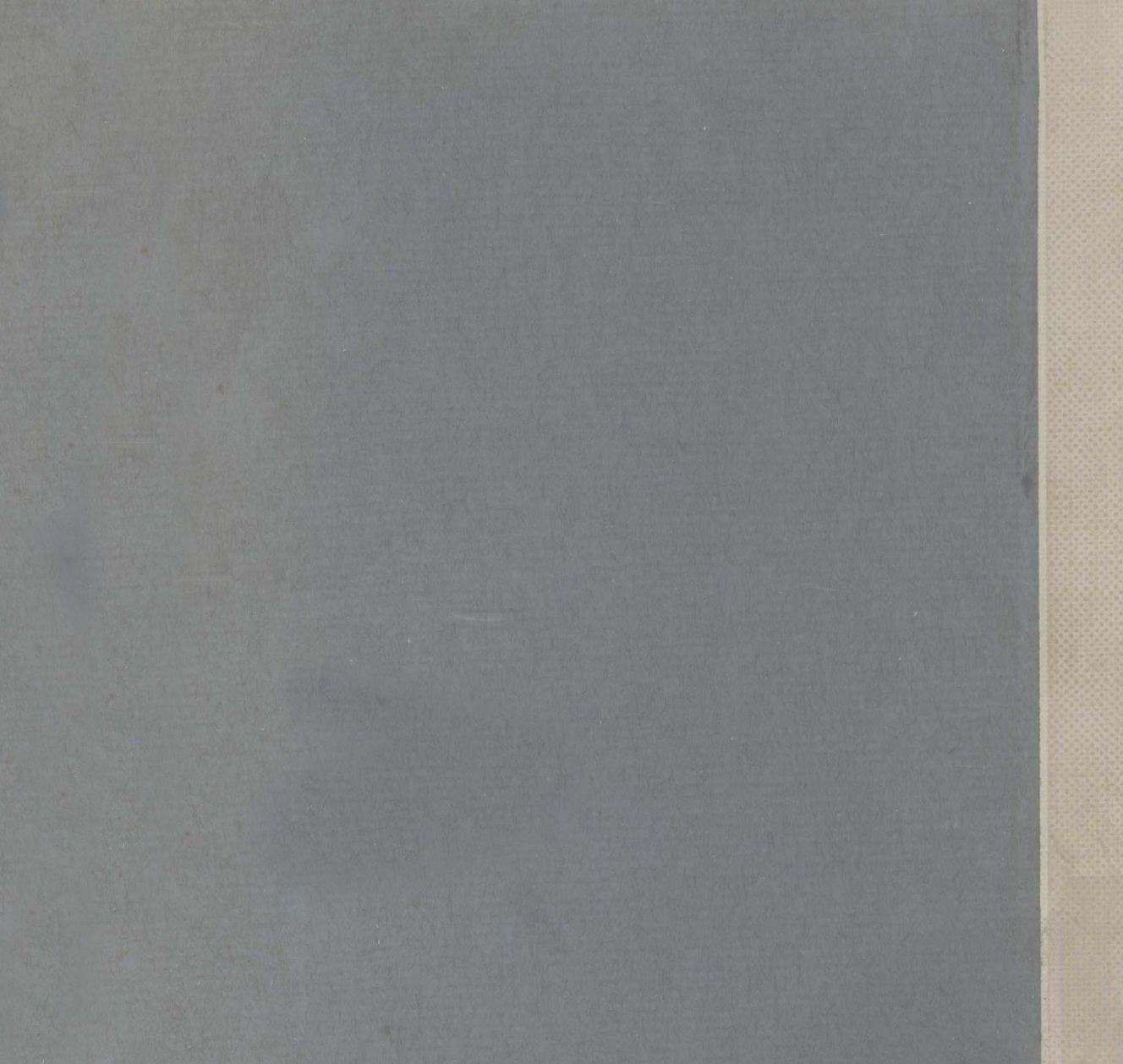






旅路 ㊦

昭和三十四年七月三十日 初版發行
昭和三十四年八月二十五日 八版發行

著者 井 上 靖

發行者 渡 邊 久 吉

印刷所 內外印刷株式會社
京都市下京區西洞院七條南入

日本寫眞印刷株式會社

京都市中京區壬生花井町三

發行所 人 文 書 院

京都市下京區佛光寺通高倉西
振替京都一〇三

定價 五五〇圓

旅 路

私の愛する風景

井 上 靖

人文書院刊

目次

詩篇

獵銃

カマイタチ

流星

渦

野分

宗谷岬

雪の下北半島

猪苗代湖

大洗

日光・戦場ヶ原

河口湖

九

一〇

一一

一二

一三

一五

一三

一六

一七

一八

一九

箱根の櫻

三

箱根・金時山

六

伊豆・湯ヶ島附近

七

湯ヶ島・淨蓮の瀧

五

天城を越えて

八

千曲川と犀川

九

信濃・姨捨附近

七

上高地から徳澤へ

一〇

信濃・大町附近

一五

八ヶ岳高原

一三

諏訪湖

一三

天龍川に沿つて

一四

辨天島にて

一六

渥美半島と伊良湖岬

一四

北陸・北潟

一七

比良と堅田

一五

京都(一)

一六

京都(二)

一七

河内平野・古市附近

一八

潮岬行

一九

紀伊半島縦斷

二〇

中國山脈の尾根の部落

二一

長崎の一日

二二

有明海

二三

あながき

二四

撮影取材紀行から

大竹新助
二五

寫眞目次

宗谷からの道、メグマの濱附近	21
下北半島・下風呂部落	22
猪苗代湖	33
大洗海岸、夜景	34
日光・戦場ヶ原、三本松の茶屋	47
河口湖	48
箱根・大涌谷	59
百子崖よりミクリヤダイラを望む	60
湯ヶ島・市山部落附近……	73
湯ヶ島・淨蓮の瀧	74
修善寺寄り、天城峠近くの下田街道	83
下田寄り、天城の山腹を練る下田街道	84
石廊崎	84
北國街道と胡桃林	95
犀川、千曲川の合流點附近	95
姨捨驛附近より善光寺平を望む	96
姨捨驛附近、斜面に立つ歌碑	96
上高地・大正池から前穂遠望	113
信濃大町附近から見る後立山連峰……	114

清里附近から見る八ヶ岳	129
諏訪湖の天龍川の取入れ口	130
天龍川、船明附近の櫻樹の道から	137
濱名湖、辨天島の鐵橋	138
濱名湖、海苔のソダ	138
伊良湖岬の燈臺	155
北潟の夕照	156
南禪寺瓢亭、錢型の石	177
仁和寺樓門	178
古市附近、……安閑陵の木立を望む	189
潮岬の岩礫	190
瀨八丁、プロペラ船の船上から	209
峠附近から福榮村の眺望	210
長崎・丸山遊廓	223
船上から見る有明海	224

以上 大竹新助 撮影

堅田部落から見る比良	163
山麓から仰ぐ比良	164
堅田・浮御堂	164

以上 入江泰吉 撮影

旅 路

私の愛する風景

獵銃

なぜかその中年男は村人の輦轎を買ひ、彼に集まる不評判は子供の私の耳にさへも入つてゐた。

ある冬の朝、私は、その人がかく銃彈の腰帶^{バンド}をしめ、コートテンの上衣の上に獵銃を重くくひこませ、長靴で霜柱を踏みしだきながら、天城への間道の叢をゆつくりと分け登つてゆくのを見たことがあつた。

それから二十餘年、その人はとうに故人となつたが、その時のその人の背後姿は今でも私の臉から消えない。生きものの命斷つ白い鋼鐵の器具で、あのやうに冷たく武裝しなければならなかつたものは何であつたらうか。私はいまでも都會の雜沓の中にある時、ふと、あの獵人^{ひき}のやうに歩きたいと思ふことがある。ゆつくりと、靜かに、つめたく——。そして、人生の白い河床をのぞき見た中年の孤獨なる精神と肉體の双方に、同時にしみ入るやうな重量感を印捺^{スナシ}するものは、やはりあの磨き光れる一個の獵銃をおいてはないかと思ふのだ。

天城山麓・湯ヶ島附近

カマイタチ

學校へゆく途中に犀ヶ崖といふ小さい古戦場があつた。晝でも樹木鬱蒼とした深い谷で、橋の上からのぞくと、谷底にはいつも僅かな溜り水が落葉をひたしてゐた。ここは日暮時にカマイタチが出るといふのでみながら怖れられてゐた。カマイタチの姿を見たものもない。足音を聞いたものもない。が、そいつは風のやうにやつてきていきなり鋭利な鎌で人間の頬や腿を斬るといふ。私たちは受験の豫習でおそくなると、ここを通るのが怖かつた。鞍を小腋にかかへて橋の上を走つた。

ある時、學校で若い先生がカマイタチの話を科學的に説明してくれた。大氣中に限局的な眞空層が生じた場合、氣壓の零位への突然なる轉位は鋭い剃刀の刃となつて肉體に作用すると。そして犀ヶ崖の地勢はかかる大氣現象を生起しやすい特殊な條件を持つものであらうと。

その時からカマイタチといふ不氣味きはまる動物への恐怖は私から消失したが、私が人生への絶望的な思惟の最初の一步を踏み出したのは、恐らくこの時なのであらう。私はいまでも、よく、ふとカマイタチのことを思ひ出すことがある、突如、全く突如、人間の運命の途上に偶發するカマイタチ的エア・ポケットの冷酷なる斷裁！すでに犀ヶ崖は埋立てられ、何年か前から赤土の街道がまつすぐに舊陸軍飛行場に走つてゐるが――。

流星

高等學校の學生のころ、日本海の砂丘の上で、ひとりマントに身を包み、仰向けに横たはつて、星の流れるのを見たことがある。十一月の凍つた星座から、一條の青光をひらめかし忽焉とかき消えたその星の孤獨な所行はど、強く私の青春の魂をゆり動かししたのはなかつた。私はいつまでも砂丘の上に横たはつてゐた。自分こそやがて落ちてくるその星を己が額に受けとめる地上におけるただ一人の人間であることを、私はいささかも疑はなかつた。

それから今日までに十數年の歲月がたつた。今宵、この國の多恨なる青春の亡骸——鐵屑と瓦礫の荒涼たる都會の風景の上に、長く尾をひいて疾走する一箇の星を見た。眼をもち煉瓦を枕にしてゐる私の額には、もはや何ものも落ちてこようとは思はれなかつた。その一瞬の小さい祭典の無縁さ。戦亂荒亡の中に喪失した己が青春に似てその星の行方は知るべくもない。ただ、いつまでも私の臉から消えないものは、ひとり恒星群から脱落し、天體を落下する星といふものの終焉のおどろくべき清潔さだけであつた。

金澤近郊・金石海岸

渦

静かな初冬の日、藍青一色に凪いだ南紀の海はその一角だけが荒れ騒いでゐた。波浪は鬼ヶ城と呼ばれるその岬の巨大な岩壁を咬み、底根しらぬ岩礁のはざまはさまに、幾つかの大きい渦をつくつてゐた。むかし鬼が棲んでゐたと傳へられる廣い岩のうてなの上に立つて、私は刻の過ぎるのも忘れて、ただ刻まれては崩されてゐる渦紋の孤獨傲岸なマスクに心うばはれてゐた。

その旅から歸り、都會の喧噪な生活の中に立ち戻つてからも、私はよく夜更けの冷たいベッドの中で、そこ遠い熊野灘の一隅の黯い潮の流動を思ひうかべることがある。そんなときまつて思ふのだ。あそこには鬼が棲んでゐたのではない。棲んでゐた人間が鬼になつたのだと。そしていまこの瞬間もまた、あの暗褐色の濡れた肌へに息づき、くろい潮のおもてに隠見してゐるに違ひない名知らぬ藻の、この世ならぬ碧りの切なさを見つめてゐると、眞實、いつか鬼以外の何ものでもなくなつてゐる己が心に冷たく思ひ當るのであつた。

野分

漂泊の果てにつひに行きついた秋の落莫たるところが、どうして冬のきびしい静けさに移りゆけるであらう。秋と冬の間の、どうにもできぬ谷の底から吹き上げてくる、いはば季節の慟哭とでも名附くべき風があつた。

それは日に何回となく、ここ中國山脈の尾根一帯の村々を二つに割り、満目のくま笹をゆるがせ、美作より伯耆へと吹き渡つて行つた。風道にひそむ猪の群れ群れが、牙をため地にひれ伏して耐へるのは、石をもさうけ立たせるその風の非情の凄じさではなく、それが遠のいて行つた後の、うつろな十一月の陽の白い耀きであつた。

中國山脈

宗谷岬

名寄驛を過ぎると間もなく、列車の左手に天鹽川^{てしはがは}が見え出した。黒つばい水がどんよりと澱んでゐるところは水溜りの感じである。流れは灌木の茂みや雑草の自然の堤に縁どられ、いかにも原始林の中の川といった感じで悠々と流れてゐる。冬季雪におほはれたら、この一すぢの流れだけが青黒く續いて、さぞ荒涼たる眺めであらうと思はれる。

列車は名寄から幌延^{ほろのべ}あたりまで、大體この天鹽川に沿つて走つた。川は鐵路に近づいたり遠のいたりしたが、窓外に目をやると、いつもどこかにその長い姿態の一部が見えた。この天鹽川が見え出したころから、漸く、窓外の景觀には北方の感じが色濃くなつて來た。見渡すかぎり原始林である。白樺、ポプラ、エゾ松、トド松、カラ松、ヤツタモ、ナラなどの林が、交互に窓の傍を飛び去つてゐる。

カラ松は金モールのやうな枝葉を見せ、エゾ松のそれはちやうど雪でもかぶつたクリスマス・ツリーのやうな重たつばい感じである。ポプラはどういふものか東京附近で見えるものより幹が細い。

七月の初めだと言ふのに、窓外の風景は冬のやうに暗鬱である。風景ばかりではない。氣溫も到底初夏とは思へない。汗は全く出ない。窓を開け